

## 「真言密教の現代化」に関する私見

—特に事相の視点から—

小峰 彌彦

はじめに

伝法院が発足して十年の節目に、これまで掲げてきた「真言密教の現代化」のテーマを反省総括し、改めてこの問題を問うこととなった。本来ならば最初に「現代とは何かを」論じるべきとも思うが、それではこのテーマのみで終始してしまう恐れもあり、またそれほどの意義が私自身に見いだせるとは思えないため、今は割愛させていただく。私がまず反省しなくてはならないことの一つに、これまで「現代化」とは「現代に即応した形で存在意義を持たねばならない」との潜在意識が先行し、そのため必然的に「現代人に理解してもらえなければいけないもの」との見方に捕らわれていたことにある。しかしそれでは目に見えないところで、どうしても現代におもねてしまい受動的となり、ともすれば私たちが主体的に主張していかねばならない姿勢が薄くなってしまう可能性も出てきてしまう。そこで今回与えられたテーマを、もう一度素直に受け止め、改めて「現代化」の問題を自分自身に問いなおすこととした。

このテーマは現代にある私たちにとって、絶えず念頭に置かねばならない重要問題である。それ故様々な角度から検討されねばならないが、私が現在事相研究室の主任という立場にあることから、特に事相の面から現代化の問題を思考して見ることを予め断っておきたい。

### 現代化とは

さて「現代化」とは何なのか。いつの時代にも問題が存在しないことはなく、人間が存在し社会がある以上必ず問題は生じている。現在もたとえ日本に限っても「環境破壊問題」「薬害エイズ問題」「行政改革問題」など、数えれば足りないほど沢山ある。こういった問題に対して敏感に反応し、私たちの立場を鮮明にすることが現代化なのか、あるいはこういった問題に直接関与するのではなく次元を異にして人間の存在価値を訴えていくことが現代化というのだろうか。こういった問題を一つの観点として、また立場を真言密教に置きつつ現代化について検討することとする。

ところで真言密教をより所とする私たちから現代化を考えたとき、「現代化すべきもの」と「現代化できないもの」あるいは「現代化すべきでないもの」との二つの面があると思われる。現代化すべきものとは、現在私たちに求められている具体的な要求に対することである。逆に現代化すべきでないことは、私たち僧侶の菩提を求める心に関することである。殊に事相の立場に立ち現代化を思考するとき、この二つの方向性を明確にしなくてはならない。すなわち一つは私たち自身の上求菩提としての方向性であり、もう一つは人々とともに歩む菩薩道としての実践の方向、下化衆生の立場である。そしてこのどちらの方向性であっても、私たちは「真言密教とは何か」という根本的な問いをいつも持たねばならない。なぜならもしこの問いが無ければ、「真言密教の何を現代化するか」ということが曖昧に

なってしまう、ただ何かすればよいということになる結果が予想され、真の現代化とはかけ離れたものとなるからである。

ここで最初にお断りしておかなければならないことは、「現代化できないもの」「現代化すべきでないもの」があるということ、これらが現代と相応しないということでは決してないことである。なぜならこの「現代化できないもの」「現代化すべきでないもの」は、真言宗の僧侶として最も大事な一面を表すからである。しかしこの問題に関しては後で触れることとする。

### 事相とは

ここで「事相の視点」の立場について、明らかにしておきたい。まず始めに「事相とは何か」について述べる必要がある。この問題については私は『現代密教』第三号で「事相とは曼荼羅行である」と述べたが、基本的には変わっていない。すなわち換言すれば曼荼羅行は「菩提を求め修行する事作業」であり、いわば真言僧侶としての基本的な実践行をさしている。たとえば加行や練行はもちろんだが、阿字観などの様々な観法もこれにふくまれる。すなわち大日如来との入我我入を目指すための諸々の修行、他人を介在させないいわば自利行の立場がこれである。これを仮に「内の立場」と呼んでおくこととする。

しかしこれとは別に、他人を介在させた事作業もある。すなわち、護摩供や大般若会や施餓鬼会などの檀信徒全体を対象にした大法要、それに法事・葬式など個別的な檀信徒を対象に行う事作業も事相の分野である。現実的にはこれらが現在の真言僧の活動の主体である。これらは事相の利他的展開ということもでき、いわゆる教化の分野と重なる所でもある。この立場を「内の立場」に対して、「外の立場」と呼ぶことにする。

「内の立場」は最初に述べた、「現代化できないもの」「現代化すべきでないもの」にあたる。ここで問題なのは、これらが現在十全になされているか否かなのである。いわゆる伝統的な事相における「内の立場」は、儀軌や次第が作られた深い意図を汲み取り、その内容をしっかりと理解し実践することのはずである。もちろん私たちは、僧侶となるための所定の行、すなわち加行は終えている。しかし現在の加行は僧侶の資格を取るための、極めて形式的な過程となっていないであろうか。真言密教が三密瑜伽行の実践を強調し「即身成仏」を旗印としている以上、この「内の立場」は私たちにとって最も肝要なものであることは、誰も異論は無いはずである。

しかし現実には真言密教の柱であり要となる「内の立場」は、その重要性にも関わらず次第に簡略化のみが進み、安易に走る傾向がある。加行の日数もかつて二四〇日であったものが、現在は五六日になっているのも一例である。但しここで問題としているのは単に日数などの形の上だけのことでなく、内容的なあるいは質的なことを含んでいる。私が危惧するところは、現在は三密瑜伽行といった「内の立場」が形式的になってはいないかということである。古くより変わることなく伝統的に継承されてきたことは、意義があったとされるから現在も存在し確固たる地位を保っているのである。真言僧にとって行体験の重要性は、言うまでもないことである。だがそれだけにこの問題は、何時の時代でも真摯に取り組むことが肝要である。

「内の立場」は様々な角度から、もう一度検討する必要があると強く思う。「自利共利他」という言葉は、本来の意味の自利行の実践は、そのまま利他に通じることを用いる。真言密教の僧侶はまずこのことが問われるはずであり、これが「現代化」に最も根本的に結びつくものと思うのである。

「外の立場」は「内の立場」で得た宗教体験をもとにして、様々な宗教儀礼、たとえば法事・葬式・伝統行事などを介して人々に訴えかけるものである。これは「対衆生」のことであるから「現代化」への具体的な試みが必要と思

われる。たとえば葬儀の際の諷誦文などの制作や檀信徒とともに祈る聖典など、新たな創意工夫などを含め種々の方法を試行すべきと思われる。但し如何なる方法であつてもよいが、僧侶自身の菩提心の欠除があるとすれば、逆に何をしても無意味となることは言うまでもない。今日なぜ現代化が叫ばれるかと言えば、一つは僧侶に対する批判であり、僧侶が「内の立場」を真摯に実践しているという認識が一般人に受け止められなくなり、そのために僧侶への信頼感が薄れてきている事実があることも大きな要因である。こういった現実の反省が無い限り、現代化も言葉だけのものとなってしまふことになる。

### 何をもって現代化するか

だからといって手をこまねいていたのでは、現代化への進展はありえない。そこで次に私たちは基本的に「何をよるところとし」「何を訴えたらよいか」、を考えてみることにする。私たちが真言宗の僧侶でありかつ「真言密教の現代化」という立場に立つ以上、現代化を考える上で、真言密教の教理上の問題を無視することはできない。真言教理を基礎づけている『大日経』は、これを次のような見地に立ち説示している。たとえば『大日経』の「具縁品」には曼荼羅行の実践が説かれているが、結論的に言えばこれは三句の法門の実践であるとする。さらに『大日経疏』は「住心品では種々の心の様相に関連して、一切智心について述べた。それ故具縁品ではその妙果に至るための曼荼羅の行法を説く」と説示している。住心品では、一切智の諸相を様々な角度から説くが、その内実は三句の法門が根幹となっているのである。この三句の法門、すなわち「大悲・菩提心・方便」は大乗仏教にとって欠くことの出来ない最も重要な概念である。今風に言えば、大悲心は私たちの根本理念である。そして菩提心は向上心、つまり菩提という目標を目指した向上心である。そして最後の方便は、この二つの心を根幹に据えた上での自利利他を含む実践論と

しておく。

もとより真言密教は大乗仏教を継承し、その上に立って独自の展開を行ったものである。それ故「大悲・菩提心・方便」の概念を三句の法門としてまとめたのは『大日経』が最初と思われるが、この三つの概念はそのまま大乗仏教の根幹でもある。すなわちこれは大乗菩薩の実践道そのものでもある。たとえば般若経の例をとってみれば、般若波羅蜜を直指すすなわち「阿耨多羅三藐三菩提に心を発すこと」は菩薩の姿勢として絶えず確認されることであるし、また「他を思いやる心の大悲心」は菩薩の根本精神として繰り返し説示され強調されている。さらに具体的な方便活動としては「佛塔に祈り、経や陀羅尼を誦する実践」を勧めている。このような精神にもとづく行動は大乗・密教に共通するものであり、なおかつその根幹を貫くものである。方法論や具体的な行動は変化しても、理念や目標は変わらず継承されているのである。この事実は私たちが現代化を考える上で極めて重要なことと考えるものである。そして私たちは「大悲・菩提心・方便」の重要性を絶えず確認する必要がある。なぜなら「何をもって現代化するのか」を私たちそれぞれが明確にもっていなければ、何も現代化できないからである。

### 現代化への試み

現代化への具体的な試みは、個々の僧侶がそれぞれの場で、これまで述べた精神を以て地域にあった方法で行うのがよいと思われる。場としては護摩供や施餓鬼会や彼岸などの年中行事や葬儀法事が一般的に考えられる。理屈のみでは説得力がないので、私自身がこれまで行ってきたものを紹介することとしたい。寺の年中行事は別におくとして、そのほかの活動は次のようなものである。すなわち「声明の会」「曼荼羅会」「法和会」「揭示伝導」「寺だより」「仏画教室」などである。これを区分けすると、事相面・口説面・文書面・文化面・環境面などに分類できる。

事相面

☆声明の夕べ……これは一般大学の学生が対象である。年一回でこれまでで六回行った。最初の三年間は「二箇法要」次の三年間は「常楽会」を修行。

☆曼荼羅法会と仏画展

対象は檀信徒で今年で二回目。

☆葬儀・法事……一人一人の故人に対する現代文諷誦文の作成。檀信徒と共に祈る読誦経典の作成。観蔵院勤行

聖典・同護摩供聖典・十三佛念誦聖典。

口説面

☆法和会……対象は檀信徒。話のテーマやアンケートなど全て、お膳立ては檀信徒の若手の有志が行う。住職は与えられたテーマで話す。

「文書面」……「揭示伝道」は年四〜六回の交換で、内容は當山勤行聖典の解説。

「寺だより」は録事中心で、年四回発行。B4の裏表。

「文化面」……「仏画教室」は月二回。仏像を描くことで縁を深くする。

「曼荼羅拝観」は年一回特別にもうけるが、それ以外もグループでの申し込みは受ける。曼荼羅を介しての密教の理解。

「環境面」……境内整備、花の寺（雑草の寺）雰囲気づくり。客殿などの場の活用。俳句の会・お囃子の会などへの提供。

これらの活動を実践しながら、密教やあわせて仏教への理解を深めてもらう努力を行っている。

## 結論

私自身驚いたことだが、昨年拙寺で金剛界曼荼羅が完成した際、檀信徒をはじめ来山された方が皆感動していた。もちろんそれは曼荼羅の絵図に感動していたのだが、その背後には、染川画伯のあくなき向上心に加え一切の妥協をせず、手抜きをしなかつた結果が生み出したことは言うまでもない。なぜなら曼荼羅それ自体は古くから存在し、印刷されたものまで含めれば現在はどこにでもある。また、曼荼羅を描く技法も決して新しいものではなく、むしろ伝統的な古い手法を用いるわけである。それでいて大勢の人に感動を与えることを考えると、現代化とは現代に合わせるものでもなければ、新しいものでもないことは明確である。

真言密教を現代化するということは、取りも直さず「真言僧侶としての意識」の問題である。少なくとも衣を着ていると檀信徒の方々は、表面的には一目置いてくれる。なぜなら歴史的に先徳が築き上げた信用が、衣に象徴されているからである。私たちが尊敬されているわけでは無いことに気づかなければ、それは私たちの甘えという以外ないと思われる。結論として述べたいことは、私たちは「内の立場」をもう一度きちんと検証し、自分たちの立場を見つめ直す必要があるということである。向上心(菩提心)をもち自分がなすべきことと思つた一つ一つの事を、「手抜きをしないこと」「真剣に立ち向かうこと」の姿勢で実践すれば、それこそ佛の加持力が働き、それこそが現代化であると考えられるものである。